

終電車——水野仙子——

『妾やわづらうてな。』と寄り添ふ夕霧の言葉が、まだ私の耳のあたりに漂つて居る。と我にもなく口を嚙んだまゝ舌の上でその臺辭を繰返してゐる。『妾やわづらうてな。』

しな／＼と縫れあふ二人の口説が、繪姿の精のやうに美しく艶かしく動いてゐる。夢のやうに霞んだ舞臺の華やぎが、まだ私の精神を柔くふうはりと包んでゐるのであつた。

浅草橋の伯母さんそこへ寄つて、さんざ伊左衛門の品定めをして、電車がなくなりさうなので慌てゝ暇を告げて來た私は、須田町の乗換場から、駄目だとは思ひながらそれでもはいつてみた萬世橋の停車場に思ひ掛けなく最終の電車が待つて居た。私の住んでゐる代々木には、この方がどんなにか近いのである。

覺め切らぬ夢のあとを追つてゐるやうに、ぼんやりとしてゐる私のうそ寒さに剥げた顔が、暗い窓硝子に侘しくうつゝてゐる。あちらの隅に一人、その中央に一人といった風に、ちらほらと場を取つてゐる人達は、或は眠りこけたり、腕組をしても思ふらしくしてたりして、色の褪めかけた腰掛けの花模様には、粘り氣のない氣分が漂つてゐる。

いつどこまでどう來たかわらなかつた。恐しいほど速力を出して驅ける電車が、烈しい動搖を少しく緩めて來たのを、ぼんやりと意識する間もなく、電車はしゆうつと一つのプラットホームに横づけにされてゐる。

『よつや』

『よつや』と車掌が呼んでゐる。

とそこらに打つかるやうにしてどつかりとはいつて來た一人の男がある。誰が降りやうと誰が乗らうと一向氣にもとめないでうつかりしてゐた私の前に、立ちはだかるやうによろ／＼として『やあ！』といふ。

私はふいと顔をあげた。

『まあ！』

その人は倒れるやうに私の傍に腰を下して、窓框に頭を凭せかけて眼をつぶつた。

私は初めてみるこの人のかういふ有様に、思はず泛べた微笑の中に、閃くやうに影のさして消えた不思議な寂しさを自ら見逃さなかつた。

『どちらへ行つてらつしやいましたの？たいへん御元氣ぢやありませんか。』

『えゝ、ハゝゝゝ』と厭味氣なく何やら言つたのが、電車の音に掻き消されて、私の耳にはたゞ『友達』といふ言葉だけがはつきりと残つた。再び眼を閉ぢて快く揺れるに委せてゐるやうな容子をみると、私は向き直つて又しよんぼりと暗い窓硝子に對ひあつた。

ぼつりと絲が切れたやうに、華やかな幻は後遠く去つてしまつて、たゞもの思はしげな、何かを考へやうとする心は、私の心を否應なしに沈めて行つた。

『畑野さん 畑野さん』といふ姓は、私に取つて憚ることなしに快い響である。私はこの人が好きなのである。けれどそれはどんな内容を持つてゐるんだらう？

私はふと、二人の女が或日火鉢を圍んで、曾ての自分達の周圍であつた男達の噂に興じたことを思ひ出した。それは一目に見渡したやうな二人の追憶であつた。

『……………昔ねえ！』

『ほんとに考へてみると一昔ねえ!』

『畑野さんもこんど御卒業なすつたんでせう?』

『え、法學士! 銀時計ですつて!』

『早いものねえ!』

かう言つて二人は暫くだまつた。

『私あの人好きさ!』とやがて、一人は胡麻化すやうにわざと碎いた調子で言つて笑つた。

『私も。』と一人は言葉短かに同意して凝乎と友達の顔を見つめた。

二人はまた暫く無言つて、一人が火箸で灰に字を書いては消し書いては消しゝてるのを一人は見てゐた間もなくすると、前の一人はふと顔をあげて、何かもの言ひたさうに暫く美しい笑顔をつくつてゐたが。

『だけどね、私畑野さんて人は怖い人なのよ。』

『どうして?』

『どうしてつて：：あの鋭さ、あの何も彼も見ぬくやうな明晰な頭：：私なんだか怖いわ、あの目で凝乎と見られると身がすくむやうな氣がするのよ。』

『だつてあの人は貴女にラヴしてましたよ!』

『嘘ですよ!』

『いゝえ、ほんとう。』と一人は眞面目だつた。

『どうして?』

『どうしてつて ほんとうだからほんとうだわ。』

『ほんとうかしら? だけど貴女どうしてわかつて?』

『私はあの人が好きだから!』

再び二人は黙りあつた。そして美しい一人が言つた。

『だけど、私どうしてもほんとうと思へないわ。私は却て畑野さんは貴女にラヴしてらつしやると思つてよ。』

『まあ! それこそ嘘ですよ。』

『いゝえ、ほんとうに私さう思つてたの、貴女が畑野さんと話してらつしやるところを見ると、ほんとうによく解り合つて、そして面白さうなんですもの! 私脇から見てゝ、どんなにそれが羨しかつたでせう! なんだか寂しい氣がしてならなかつたわ。』

『まあ、寂しかったのは私ですわ。あの人は貴女を思つてらしたんですもの：：。』

間を置いて美しい人は嘆息するやうに言つた。

『昔ねえ!』

『全くね、もう四年になるわ!』

『さうだ、そのなんとなく寂しいのがその内容の總てゝある!』と私は思つた。その外には何の際立つた感情もない。

見馴れた停車場の灯がちら／＼窓にはいつて來ると、乗換を知らせる車掌の聲が、更けて行く夜の氣に徹つて澄んで行く。

『もし代々木でございますよ。』と、私は氣持よさうに寄りかゝつて眠つてゐる畑野さんに聲を掛けた
『や、有難う！』

そこに降りる者はたゞ二人より外になかった。私は掃き清められた段々を竝んで降りた。

『あゝ馬鹿に睡かつた。』

『随分召上れたやうですのね。』

『えゝまあ可なり……。』

『お友達は大勢でらつしやいましたの？』

『いゝえ、なに三人ばかりです。あゝ無暗に怒鳴り散したものだから、すっかり咽喉が涸ちやつた！』

私はそれまで、先刻耳に残つた『友達』といふ言葉から、譯もなく誰かの送別會といふことに考へてしまつて、そしてわや／＼と集つた大勢を心に畫いてゐた。

『四谷からお乗りになつたやうでしたのね、どちら？』

『赤坂の方でした。』

私は不思議に心許ないやうな氣がした。けれどそれ以上立入る勇氣はなかつた。

櫻の木の下の交番の巡查が、靴の音と下駄の音とに振り向いて、薄暗い中から二人を見送つた。

『どうです、近頃何か面白いことがありますか。』

『いゝえ、ちつとも。この頃は世帯の苦勞ばつかし。』

『ハ、それが面白いんじゃないんですか。獨り者はちつとあてられますな。』

『あら！そんなことぢやないんですよ。』

『ハ、まあそんなもんでせう。時に何は、矢澤さんはどうしました、赤ちやんが出来たんでせう。』

『えゝ大きくなりましたよそれ。』

『女のお子さんでしたね。』

『えゝ。』

『まだ一人ですか。』

『えゝ。』

『貴女はどうです？ハ、ハ、ハ、』

後から／＼と斷れ目を厭ふやうに言葉を次ぐのと、男足の早目なのに少し息を切らしながら、それはほんとの調子ぢやない／＼と私の心はかぶりを振つた。

『もう一人位あつてもいゝんじゃないんですか、寂しいでせう。』

『そりあ、どつちにしましたつて、二人だつて三人だつて私達の寂しさは同じだらうと思ひますわ、たゞ複雑になるだけのことぢやないでせうか。』

『さうですね、寂しいですね！』

『私、寂しくつていゝと思ひますわ、寂しいのがほんとなんだと思ひますわ。』

『さうでせうかねえ、だが僕は寂しいのは厭だ、寂しいと消極的になつて不可ん！』

冷たい夜氣に觸れて、少しづゝ酔ひがさめて行くらしく、畑野さんの足取りは思ひの外しつかりしてゐる。そのこつ／＼といふ靴の音が、時々暗い道の小石に當つて、ひつそりとした屋敷町のところ／＼の門に、薄ぼんやりとしてゐる電燈が瞬くやうな氣を起させる。

『女は駄目ですな!』

暫くしてから、畑野さんは何の續きともなくぼつりとかう言った。

『さあ：：或は是認するより外仕様がほかないかも知れませんかねえ：：』私はそれはどういふことであるのだらうと思ひ、惑まどひながら言った。『だけど：：。』

私の心は少し落着かなくなつてゐた。もう三四軒先の荒物屋の横町を私は曲らなければならぬのである。なんだかそれが残り惜このこしいやうな氣もする。けれど一歩でもそこから先に私の足が出たら：：そしたらそれが、私が私の平和を蹂躪じゅうりんする第一歩なのである。

『だが貴女はまだいゝ、家に歸りや待つて呉れる人がある、僕は寂しいな、これから家に歸つて、S(犬の名)を對手あいてにして：：。』

私はふと立止つた。私は荒物屋の角に立つてゐる。畑野さんは一向思ひ懸けなかつたやうに、そのまゝの歩みを猶二三歩保つた。

『ちや：：。』と聲をかけると、初めて氣がついたやうに一寸立止つて、

『や、こゝでしたか、ぢやさよなら!』

そのまゝ元氣よくこつ／＼と畑野さんは歩いて行つた。

私は暗い横町にはいつた。と、ものゝ匂ひのやうに夫の懐しさが私の胸を包みに來た。優しいその眸ひとみの前には、雪が朝日にあふやうにこの寂しさも消えていくのだと思ふと、すらりとした背廣うしろすがたの後姿に私の心は餘計さびしかつた。

どつかの時計が長く／＼後おくれた十二時を打つた。

【入力者注】

底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本と行を合せるために、スペースを挿入したり、フォントサイズを小さくした箇所があります。

底本：「處女」大正三(1914)年一月

テキスト入力：小林 徹

公開：令和六(2024)年六月五日

リンク：[水野仙子ホームページ](#)